明星抄

若紫

末摘

四

若紫

巻名　花鳥詳也源氏十七歳自三月至冬

[illegible]　俗ハ云ヒとり也

朱 疝痼　古墓切通俗疝久病也一曰小兒口生瘡通俗固

[illegible]

花鳥杜子美詩手提觸髏血

と云句を誦しても疝ハとるとゝ是ハ杜子美

花鄉歌云子璋觸髏血摸糊手提擲還崔太夫

と云句也　朱 手提觸髏血とあるハ五言七句

似ゝり見い夜深見戰場寒月照白骨

まゝるひい厭術也

[illegible]

を沙汰をまつりあつかひ給ふ
てをくなる人〻多くとも
つゝひとゝ云ふ重きかるらも也世間の物を用ゐ人
あはせ給ふ物語也習也めぬ所を書きを
さてゝ　鞠つるまきと云ふこゝろ
こゝそ也あも　世を流布せし也つゝにあまたの也
ちうびゝうす也
ちうこゝろかつる所
癒ハ去ぬひゝてゝかくてゝおちあるる也
おいゝまりて　慈恵大師の事おけゝり毎物
りみゝまり
山也樹ハまゝ盛りて　引ゝ不寄度ゝ

ろき時ゝ也
ひまりてゝ多年る　京氣ゝごひゝ
而せゝさは多　河海云ひろさ也ゝく深也
ハせゝきゝる也ハあるきなとうろゝ也ハ
ハさ也
寄也さ海も　鞠つる寺普四十九院の所也
雅と也知也給ふ
あ船ゝこゝや　源の也ひ行ゝ移也
きんゝの　多也てい現世の彩樂なとは中古
せす後世のつとめをとうやとはすゝき事と也
朱　修験者と云也

さるとおりのつくりて　　翁をとなる人
河内なるさるとさふんとあり
すせをる　すせい合字也吸の也れ所と寸記
てをとをあの
つらをり　　ゆい意雲と月乳濃也枕草子を
くて雲記の海の浦らをりとを也
朱の形(キウセツ)ものつらをり
おれこ来ると　　傍新の傍乃ちつひの字
さまの也万のをとさ海みりてやさくるみあり
をるこの也第花物語光思傍新みり仮
浦りを擬(モ)する也

きてのけなるやらう　　屋廊也
この二とを　　三年禁(キン)島のゆ来るみくり
あまりやつ　をるるきてもうすれ
源氏の也ひて源り浦つる経り所まりに獅(レウジ)命
なる浦を海を傍新也字もうをれと浮浦る頭也
きてのけなるれるは　　おまるの也尾云所まる
あ海る

かこに女う　　源侍の人所云也
寄をこなの浦つ　　看護(カンキン)をこ行也
月こ海まにいるんとあ海こ海を
をりいをり海さるるあ也はをこ

のあるなり

きりの山より立いて

たきんあり遠山に移也

源の立出る也 瀧とまとる

うら原あり 狂人

源乃羽也

おまはいと遠く

地獄也 伊勢物語より人丸

人の國をとに行る

そもそもうら原をんや海さりをとに物の

ゆかはいとうら海さ世ならん

海をとりて絵を書 事家にくまり書

出しる也

なふりたるけ

わさ海をとをとる也 名を義と也

源の立出る也 瀧とまとる

うら原の人也

狂人の羽也

地獄也 伊勢物語より人丸

よろかよまきさうはしの中

此時遠皆良藤うの物語也

ゆかひらなる 帆 寛也

元國のはまれる

播广のあれる也 朱明石

の入乃事也

きりり

狂人也 多田滿仲を新發意と云 御堂殿をとうの羽也

いとうかり

ひうら 揚羽 ひうらと也

大原の後也 大原の入乃事也 大原の像 源 次

弟 昇龍 をとまる人也

を傍の中ねをすて　中将をとあて家中にく
をれまりるを民こう孫の所なるをまをを傍を
をそて国のもんのうい願ムを会ム事なるを
ちまを世をひう絶とを也　此郡あまこてを河海
寶ヲ方部ノ所ノの例をひのきり又山蔭ノ中納ノ中ノを
辞シて後ノ中ノを位して国ノ下ノ守ノ三代ノ重ノ孫ノ
ふ人ノ元ノ　朱　参議にあるされ流サカヒをこと引文
ひよう元西乃国ノ
西をなきを也
ふ元をは　海ニ山形とい書サイエをとを位ノ元
有よひ海ノ上にあの郡ことりを也

さいつはまりてをりて　朱　近江ノ国也カツコロ
良清ノ文　播ノ守ノあり也
西ノ方ノ海ノ
ひまをを也ひ国ノ
しく位形ノ安也
さはいんや　国乃守をるをはゆるなん
うまんもあ郡を也
ちく其ひをめ
きをういあ安
代々の国ノ元ノ
うるあんは代々とは方也さやうの位をりもを

源の四位也
良清ノ朝也
後国のを一位四ケ条りて
ふるあんは代々とは方也さやうの位をりもを

人のをもてなしのあるとうけひろめやも
吾身のくいてうにに　八乃丸の身いるてよ流
ひ事さへあるおとも
けへ乃とり　けひひもあをてにてうの始りを
さーやも
やふさ海てとなり
八乃義丸つきるにてりて
国毋那とにを左きそなとも
このようこう　義あるよへ孫と云ふりて乃丸合
も地吉祥天女の本義をひけるりや祝る丸
祝ふい及ぶてうは流れる丸
かーいつは　良清地

とき年乃除国ゆり　鈴

けり良清い入道の遺云ふ事あり
ゆいこんやより
けるよ人地
いそやさいみとも
文うこにある傳ゆ人の意い
ふ地る人き中を良清いりあせともけ入たいる
ひる海人りて海ーある事いのしとひかと
す地あるあいるふ歌よのうゆひてうん吾や猿
ゆるー
はすこう級る人ふれ
毋の猿姓ゆとう地松風琴よけ猿姓丸事みてうり

良清ゆ相地

よ紀ま之人日ろ人

以毎の教方ろり教ろ人を人ゑ

をとひてて何長ま都を学ぶと也

情なお人にをりゆゑは　今迄の国のもれ不望

するをも云のまを迄たれとも極くり情みを人な

とれは国ろもまよ成く人たのゑまを云ゑもり

て迄へと所人ま所ろ人をと也人なりゆゑもたに

文字を書しそ多筆の一説あり不寄用く

何ひわりて　源乃朝也すくせろ く源よ入孫

と遺云せしる也

そこ読みるめ　や高の雑角となり

[illegible]

ゆうゑをうつむ　源をちと世のる也人は

りそひをを所　[illegible]

ちろひろ所ちるま[illegible]は教[illegible]ゆ[illegible]

や人く推量[illegible]して卜也

ろ教ろるまぬれとをを也　今見ろ所ろ也

は教強よ新移迄て鹿もをこて也移の女也

はや海ろ也　海ろ也をとろ迄は教けを

ろろれるとろもろ巻の乃夕見の巻ろり也をを

をて球よそのよ也あろるや

夕ろれのいろろすを　およ物なとあるあのれ

巻人間を西ひ移て夕巻れろすみろに也

出家用意あれば也

十二ありにやあらん　はつ〻也

身いやあらく　おだなくして思をとり

すなわち物也

何事そ　尼公の云也

こゝあきらかなるあり　はつ尼公のうゝ

はつとり物也

お前云のあれと

つゝうあるなり　はつ尼のこと也

第四金剛身品持戒比丘比丘尼不得畜養奴婢牛羊非法之物

沙弥戒経をひきり涅槃経

こゝやとい人　あり〻と也

うちをあり　あり〻ひあるさ海也

ゑんいゝう　都合云はとるなりあて髪あけ

たゝはうゝるゝきと云也ゝさまてゝ

ゝとゝ長くすまあるりうゝと云也

さるゝゝゝなくゝを法

髮おゝく物る也をぶめい也

ゑゝりにまれゝ　尼公ゝ羽ゝのつゝ比人

十ゝゝ量ゝを物ゝは物ゝゝるゝの代

ゝ者いゝゝあゝゝ海ゝゝ也

加姫君十二ゝて　はつ〻母也　按察大納云

ふるれ降る事也
ふりめよなりて　くすぶる也海也
おのひとん　むあられする雪也　朱　雪也雪
ふりう也
ふる草　義の
傍新あなさうり　うちに雪の雨と降雨へ
傍新の乗降也
この世りのしる毎　傍新乃朝也
いくばせうそこ　源へ傍新の書振ハ雪と
てふり也
表なるへをふる雨　源の也源乃むさうの也

ありさみもうめうは人をふ付降ますして也
きよくひのまくのかりさまする人いうみと
おりの降る也
あの人はかりに　雨垂よりまとふ(まと)也
折ふ降つる　源也折休ふ降也
雨乃見なれて　うちに如ハを雨乃見乃雨
迷ハ源の降て字降也
よさりはんまりまをる　傍新の使ハ事乃朝
也うさるとハ過の字也　河風云過(ヨキリ)すよりて
まをる也ふ何過い度也わうり雨乃見也
過の字ハ音也　平声　光也　とるよさ風の時ハ

平声也毛詩第一江有汜篇云　江有汜之子歸
不我過云〻又山谷詩近人積水無鵶鷺取有飯
牛浮鼻過云云是皆平壱也來心也
朱　はしたなくあまりてなどかくはかりなるこゝろ
とゝなり
いとあるに十よ日　源乃羽也
うちやうなるこゝろの　勅撰のはゝ細あるまし
きをゝ一験なくて　聖の威德をいとゝ
かたりあひ給ふ也　是も源の羽を源さくし
ひなまし也

今ゝあるこゝろ　傍註をこゝとゝ
ゝ給ふ時多也
すゝめ給ふ傍註　傍註やがてよりの
そゝし給ふ流　源ゝおとゝは時帝の
あのきをくすゝしのみ給ふ也
ゝまきこゝあ人に　さきゝ傍註の尼君ゝ我
ゝ給ふをおとゝ　ゝくいひきこえ給ふ
所給ふ今ゝをとゝ　ゝとりをこゝれとゝ
なこゝ涉もあれ也
給ふ中とゝ　こゝろなをもよりの
とゝろなをもとに文字なゝ給ふありに文字あ

つまく面白くなりぬべうこそ侍めれ所詮もの
したりとこそいへ
世のつねなれ　源氏きさきの世にはべるべし
けはひ物馴れ乃相殊勝なる人の敗壊の姿を見
給へ馴れ給へるをもてなすといひ其事に望む
時の執念(しふね)いと深くなりぬべし
今こそ世すべくは侍らめ必ずあるべ
き沙汰(さた)を濫觴(らんしやう)をなすべ
ましく侍の世に
とのたまへ
のたまふ御ものがたり

源氏相逢(あひあ)ふことをうるさ
がりてこの殿
うちまもりひく　侍従
ものしく系(けい)なるものかな　侍従
なにとも
この女御言　源のうのみとなきにはあらぬ
言ふかひなく　しかるべきにはあらぬ
うとましかり方　中将(ちうしやう)
絶えぬひとの痛つく
さてはいとなりきり　侍従の君有真(ありさね)
さてこの殿の孫

みこのはすちなれ　無子家に養はれ給ふ
　　蓮と色香をあらそひぬるかな　明く行くよひ路
　　と詠ぜ
人の程も　人うちとなりて以下源の氏
　　源乃祖也
いと高きものの路
なく成行程　僧都の祖也女子の一人侍
　　れと也
それなつまて　民部卿ひとり也
　　とあり
此道はとあはさる　源の氏也
あ御一きるなれと　源の祖也僧都よの路也

ふりてと強切て強行りてなんとなに
　　ける毎すれ也
まさにあらたれと　也る孫子路也
いひなつけ給とれやうにあんめる也
　　僧都に祖也
ゆとう道ーうるまま
　　みとなてひ叫ーさるや
そもく女い　いまる僧都の祖也　朱三位乃ん
　　ゆ多人ー
わうと佛りの路ふうに
　　僧都の祖也弟敦の路とめ也
山風ひやうに吹まるり　暮三位中也

さ海道

滝のもとみも海さりて　毎は滝の名所下

すと道　山中一夜百樹百重泉をいふ

うこと

ねもすけ形を聚と　引竜(イン ジャウ)の河弥能弥な

ふ人

すれきうそくに　ひめてやさ〜きはさりあり

ぬかえ形ふ人ふ地すへ　あれと

のまりにさを初めぬやうにあとをとをお弟そ

ふいさり出る道さそへ人をみしさはとそみひら

耳まやとをて逆也　さにあるはさ道

佛のはたらへ　源氏物語さきに入てをとゝ

ふさひなれ合ふ人へ

いなる方れはたらへ　はせそ法女の名道

けめしちつをなりと　源乃物道

物草の　恋をさう〜まも道

さ〜にうやう　はせ女れ名道

ちろめうるまをう　伊勢物語大和物語

みるはれめふ物をを道

をのつ〜さうやうりて　源氏道

はせやよりいる紅よ　ちとものとを道

はりはつてんを道

さるにてはけふ五月をも
ゝ〜うなれて　　新勅撰
物ゆゑ　　みなのはなのはなをすきうまのきかうあい
　　和なさて過しを去ぬ秋を
　　ゆくすゑうるさしはなれ
　　うあれ吾山住の秋をあはれ
　　ひとうはるものを
　　外されいとひとしるしの秋のつゆ
　　をよそりて　　けふ
　　うのの人はなる
　　なあと也人はなれそ度と也

　　花百首
　　引歌
　　源氏胡蝶未ゆるひ給
　　ひとことさく侍り　　けさ
　　節をさゝるまゝ也
　　ゝ也
　　家にさゝる人々の道
　　ものふるやうなる人こそ
　　とて居ぬ出給也
　　う絶つゆ　　源の胡蝶
　　也と也
　　心ゝはさも　　源乃
　　みとゝ也
　　御いをのつゝ
　　はりとゝ佛いの無常人

そなたに云りて猿さうへ〜尼元の御前にてきと
元御出給いあるとも
けるとの給へとりかるる
尼元の御前 朱つて
鄙国とも
源氏物語 ほとのるも
のの思給そりきん ほとの母君とも
ひつまりうへ〜ふ人なる
相撲の子共ふとめく
立まとれ所〜るも
御前〜 今ほとも母うとやくとなれ
強てこのみなる所ゆ〜ひなる人〜とも
うなりの給りかくてなんと 後切合〜

今まてつあてなくてやさあとも
何とる所と怪(ケシ)おろうとも
御さまとんかなも
いとうまてう 尼元の御也ゆうに笑て給
をのりかくうれきき事とも
きこめひあて給
なをあく学ぶて給
ともうきたるまるる人〜きてあやまり給
かるいまさ鬼国(ヒゴ)より初(ナテ)紀人まてある花もとも
あ〜きまひとりをうみ人なる人
ほとをとも
みなかつなうす
源氏物語ゆ〜にく
業用を知給ほとも

いとに事なさまを　　尼君の心地打解(ナヒ)き給ふ

いつくしきを見しるにつけてもなほ心地

俤新なるやうにぬれん　　立給ふ地

法花三昧　　四種(シユ)三昧(ゾイ)

咲まゆみ　　義なし

ゆかしくて　　俤新なる心地ゆかしくさしらる地

春月耳なれ給ふ地　　いきくる色なるさま地

朱　是は源氏の奇也　　もるの一義下に二有り

源氏此奇也

廉のくすりを　　春山面白さ海地

ひるまうこと　　聖俤新の俤へ高地

こたんまいりを地　　護身(シン)地

なれる色のいとしうすれひあるを

河海獣(ヲキ)義ぬまは色乃すく地ひあるを

調(テウシ)子のさくれ色あるを

新くうつなて　　くうん功(コウ)地功の入方海地

朱　東屋の色ものり

あくはりもちひ

三位俤(ゲウサン)山の人とみくうれ

山ふみ　　源の物地

宮人より　　歯(ケン)乃奇地

うとんを地　　俤新の奇地源氏を優(ウドン)婆(バラケ)羅華

よしたまふ也　朱　その年に一度ずつ必転輪王出
世云云三千年事如何　私　優曇鉢羅此云瑞應般
泥洹経云閻浮提内有尊樹王名優曇鉢有実無
華優曇鉢樹有金華者世乃有仏
時わりて　源の意分を早下しての給也
仏のうへ　加持の智也
ひ一重　面白意ゝ山猟戸を帰り
わく山の
ての白ゝ
そうり聖徳太子の　仏教引出ゝ給ふ也
思ひ給ふ　源も皆ゝに布施を給也
仏教いり給て　ゝのうを見給ふ
ちいさ見給ふ　見給の方人乃意也いとみ
給事代りのめ一給也
海とも　源の今とも給ふ也
よ弁をやさ給也
六殿ゝ　菱ゝ見給ふ也
ゝゝ見給ふ　山意に仮あるまて面白
人ゝ見給ふ　皆ゝ
源はおとのけを見給ふ也
さうの笛りを給ふ
山見給ふ也　伯牙鼓琴而六馬仰秣

[illegible]
彈給也　源くれなゐ

はるさめ　はるさめ也

家もとはありさま　[illegible]

[illegible]　[illegible]

あさりをとめ　阿闍梨　七高山阿闍梨

近江國比叡山比叡山　美濃國伊吹山　山城愛宕岩　攝津國神峯寺

大和國金峯山葛城山　毎年給穀五千斛春秋各四十

九日於伴山修藥師悔過祈天下五穀也承和三年

のちやうに一日ニ五ヶ所やすらへ

大願成就方ニ引給也

わらはは車に　源氏繪ニ桜をりて大殿の奥

はなのあるをりの也

殿ゐもはるさめ　蓼也ゆゑ也

如意也いの　蓼也ゆゑ也

[illegible]　蓼也ゆゑ也

源の蓼ニ[illegible]也

[illegible]　蓼也ゆゑ也

奥へ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

御迎へハあさましの　まれくとんたりく乃
給出る月のくやうなるらと被給也たるとれ人の
おもひなとこうあれ故ホン書サイなとにとゆへつら
きみしとなるゆへなるへきしお也
よしや命こそにとて　命こそかなひかたかへいものなめれ
何人へとおもしもせん
みえさせ給ん程　紫上の事也
若君なとハとおもてよりまめい給ふれと
おもてなるとにかひやうなるとハかり候也白ひやう
なれともさやうなる事也　朱　若君なとハかひ
やうなるへきかりしと也

ひとへ川白服　又宮の方ハ切られとも色々とハ此色人
給ふと
文の目は文章也給ヘリ　中山の文也
りそけなれとり　是より又此調なるへし
西郭ハ　とめてハ笛なる也とゝめて来られとも
西郭ハ方をさへなる也ゆるとのし也
秋の末此風も　翻まろ比おもてうつる秘
乃む東此方の風のうしろめてはよ
あしつへ給へるさ海も　秘なる菊も可給河流
説々
さうそくの　御かたハ央字也鈴の也

めをあやに　月のあやしきを思ふ也
あみのうらいさや　尾花の白也
ゆくてはしらぬ　もとりの羽也
朱　ゆくてはしらぬてとは也
ふりそへ　うちそへまさる也
まさ雁波はをこに　雨新しきをもとる也
の函をとはゆふこの志ほつきをいまさらまなかを
をさへとりてしらぬすも也　ふれまはいあら
もを波の事也　波の通りみちより
鶯歌　鶯はこの志をもとり
いとゝうるめさう　おれこの羽をもとりけく

きり
はもうらぬ　雁也えうる也
つきくう　雁也えうるいひはくる也
はけはうらぬ　数書也　雁波はをこへとある也
紅よ帷をも殷書（ハンヤガキ）のつぶくとをる拾をる
尺あうし也
めさう山　雁波はの袖をうひて也ひえうれ
色新さへうの新はに方にをせうり
波そあて　くやくそ波うめて色うの濃れ
八雄のうめうく山の舞はあひの本のはとく
梅（ウメ）くやのうあり白い我身弧早りうる

新古今まいみ〳〵ばかりと也 或云うへまは
源を給ふるだにまれ也
ひとうとひ給ふ　　おの〳〵云の乳母共也 ひと
ふるひ給ふ　　ふるひ給ふは今らとゐたてまつる也
若つかの子なやうに給ふ
　　三月の事なり
王氏の命婦也 ちりさたは妻
子源氏家令のすけ 倍の伯 例家よ
始て事也 也 御子也 あさましうもてなし
いつかしきもの也 朱河云則天皇后ハ太宗乃
妾也 後為高宗后 光仁天皇后井上内親王 通植武
天皇給

なのめなり　　いよ〳〵とひまさる也 あるも
也 朱 御 行 ふるまひ也 ものまゐり也 ゆく
の事也
何事をいはんにつけてもさる海也
　　おやの事となる
ちかの山ぶり　　ちかの山ぶりは
なるへし 歌 秋のよ月のさやけきにも
ちかの山ぶりこえぬつるかな　　定家卿の歌
みちより　　おもひたちにけり 海の山よりとも
あつまちぬ 義や 義 又 風 ちりをあく
海のやまぶりみつたる 義也 まちや

けるハ建暦三年三月内裏の歌合に有之内也
朱雀の字清濁あるべきなり〻ぶ法の時濁也
又　源の有之逢て実方朝臣
唯義の中はやうなれハけるの中にて
分もきこえせて　さすらへの時也
もゝとり鳥なき海も　遠向面白事也なさ月になり
世語りに
もゝとりの鳥ハ人の云伝へきこえ也　さめぬ義
義はけます義也　こゝにて意ハいたて哀也
はなをはしめ　おなじにまされてさしの利
ゝり鳥ハ人のいゝ〻みをこうなをぬぶ人

行しなるへし
歌よおもてて　かゝる中に今ハ紀の義ハ
ていゝは義をゝ　源の病悩をゝいたと内ゝ
ゝいなるなと　源の病悩也
ゝ　懐旧の事
ゝ　四月ゝ六月まて三ケ月
一本六月と何ゝ
院ニ六月とあれをも月と続て冷泉院十六月な
ゝ院ゝ云院ゝ　十月ゝ
来花云　翌年二月十余日比冷泉院遷ゝ十ケ月ニ

はるまでそうせさせたる
人々に行とて義経をたすけそこなひ
あはれひとりよ　源氏のうち
弁の命婦　二人の為に河内守に白を切とて
書まれ紙に書く弁の命婦と接也一人は王命婦
ひすめ也　但二人ふしみてもるようつよう
内うちは出羽の事　ように内うに義経也
皆人もさのみ思もとり　皆人をさやうに
ひとりとも也
中将の事　源氏也
さ海上の事　はるの事也

朱花ニシ
思夢妄夢正夢傳説事丁固松江淹五色筆

及ひのうおりもなけぬ　源の天なれそる
へさとを儀也
うひめありて　もるる義てなく非ズ花ニ近事ニ
七月ふなりてう　嫦娥四ケ月ケ人
いとしき　内のうち殿ひとりくはめすも
ふうてに　懐姙のはらみ也
はるそひるやうく　秋ようなれと也
うのうるの人　ぶとこのうをうる也
ものいはしふのう　いとけ殺きうしたる
あるものの也

引奉る〳〵今ハうき
たとこなやうやけるすのこなりまどの地
古家荒廃　はるかの花の地
哀のうやや　源乃翁地
わきとうう立ちかつる　はらそうでわざと
やいそすう地
いとかうらいたるうる　かねその翁な
ふへ
いやひつ〳〵きに
いぶ〳〵ひらうて
くどけうまと地
ゆうりなうれかうき　うちつけうるをさ

きなやうりとなり
きにうるおいまつりうひて
源の仕見ハいたれかたあゆ地
つまかたへ立のう　源九郎地
ひ形よさ海　はふこのうる地
ちうちうちの　うちうりれみうる地
の形ひすうう　源之の事〳〵
うくりなき鶯　いとけなさ地今ちと
鶯もうさうりてと地
ねうひ仕うたるう
ぶきとなり
後生のさうりみうる

いとをもれて　行るのきさ原ゆ　ゆれいろく云
竜をとヒ源氏ゆの行也　こゝ〳〵ゆゝてとゝり
て続きりへ〳〵
いとかゝりけりさ　いまこゝ元の羽也
けゝ元ゝに　はゝこゝ也とゝらと成へもあゝ山と
のゆゝ出ゝこゝもをかゝ源氏こゝゝをとゝさゝる
ものをとゝ也
新りゝ実行て　源の実行て也
何のあゝこゝ元ゝ　源の羽也
いてやゝゝゝりあり　お納元羽也
いもあゝとゝさい行ゝ也と　源ノ羽ゝ也ゝゝと

とい新行ゝもゝゝこゝゝけかゝひゝるゝ海を
みゝり行ゝゝるゝきゝめゝ　ゝぬゝまゝゝ行也
ゆゝにゝゝひゝゝ　源の元ゝ　いまゝゝいとける
きゝ海をゝ行てゝゝゝ　ゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝ
いゝけゝゝゝさ　我アいきゝめ　ゝゝゝ
とヒけゝゝゝゝこゝゝ　ゝゝ一竜と清行ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　引ゝ
お納元ゝ　お納言のゝゝゝゝゝ
とゝ也行ゝ　お納元文の羽也元ゝゝ
へゝ行ゝゝ也

あるいはこれらの
あるうちなる　　若菖蒲はゆるしを得給ひ菖蒲
はつとのはをとだも
さえん寺をすれ　　あひうんあうも知ぬ
あるををこすす嘉そきえんそこなき
の所ようこ時の事外とひも給也
をとりや　深切（シン セツ）ようなる給ふ也をくん
をとりのきそいと造ありすも
をにつそ　いつ音物ふをくさのを也
はは一おゆくりむさこの奇れを河海説
このおそうはつこそこうあり

十月に　紅葉賀巻よあるくくを摘まをい
撰四巻の並也　紅葉賀巻いけ巻の中を摘
此中とにあるる也
朱雀院い
山里人にも　俗ざれて久家（ヲト）
仕給ふ也
ありくくつつ　おあのみもみりくさ也給つる
ゆえさせんまるとけうそれもわとけ給
家七日也ようの日数を日巻よ書てる也
給けれ多けれ物語（ゴ）多給（ハウ）也をを分くく
ふらある月の　みの月也

せきんのさうま　世ろれたる理也
新さうしろめ行よ　はつこの事也
こはり長而　相撲の子ゑてうしろなれる
はのすまて　ゑ出行也
いみみとまて　ふこ長へ出行也
まいの不よいれ　ゆよ有一角れひさし
うう
なるへ
お酒ゑはるさ海なと　長ゑの法ありき
まをやや
宮り渡し　お酒ゑの羽也よの長ゑ
のはまへ海市　ゑんと也

ご姫ゑの　ゑよれ毎ゑをいるゑ
海して　繼母して　そいいとあがつなく
ゑひ行と也
ひとむをたちこなめぬ　一向二家三家の時
ゑは長ゑ別れ　ゑもありぬへしやすけ
みもあり行へ他人の中れ行居もいと
ゑ行つるきと也
ひまさ物一行る　新蔵はふこれ長ゑ人
あり其中に一のゑばらりきへ有
ゑ一それを長ゑと也
すれ行ある　長ゑ也

なるかう　源の羽也　其いとけなきこそ
哀なさるれとも也
あるもの　芦(アシ)のいろさにさうの帽をとせさ
つまこるめるくともを　なるこう海くさい面目な
きゆ也　彩勅撰(シンチヨクセン)　撰集人ふ和　あるわ氏潘な
きこそ白殿のもくくあ若い者こつとを
めけまるくん　無面目と也人偽なこう海
ゆと結ひ氏をめさ海かんと也
ふ殿の　源のゆひを結ひ也ゐ　おびさる
いうけさる事ある人くと也
まりおるもと
赤印(イルキ)さ海也

ゆゆるけまの　お頭云う物なれて此也
をつとと也
あそこえさくん　引ものど越ぐ氏お板の
実は高氏羽を用諸くと海也　は数多伯
まこはいさ海一面ありてとおりす也
朱八志れを分いそけとを人てなを
越さくんお物の実
差いうを志ゆえ　差いはふこと也うとと尼とこ
家氏ありますあり　又高也
宮りいあくと
源氏羽也
こちとの結を
こうくとと也

いさてー　いさなとの心也
源の羽也
いまさらに
されいう　はなんせよいまさらいつひな
きはさらぬなる物をと乳母申也
長紙さらいまて　とにさぬをひとりはなる
あへー共あらひへをへく髪をさぐり
はなるへー
うたまいなるぬ人の　はるとは心也
今いまろそとへ人　ふつまと人と自を切
てあうとはなる　はるとは心也
さりとも

めをと　お須云也
うつきはよ　はるのかすもなほさりあるへ
ゝ郷なるへ人ま物をと語ふ也
明れなるあ体　源の羽也
ゆすれむへり　お須云也ふるふ
遠まるへきと也
けはは四十九日　土月と旬(ミツ)没切(ヒヤウガウ)慶(ケイ)後なる也
このりき筋なるう　源の羽也うとて
さは又ふ色用る也　ふい涙(ナミダ)うしはさうう
てたてーかへきと也
はるものけさう　ふれ哀(イヤ)くるうう也

いとまひてかへりぬる
雅之なり
朔日の夕　姉の門(カド)にまかるべきなりとて
云あへるを聞
立とまりて　けさうみさるの時ばかりに
京へ立ぬ　はるかに立とまり
行へとも此けしの物のかたりて斉(セイ)姉(シ)の
もとへ　此けしは何ものなるやと
きけば半書(ハンシヨ)の筆者の姉こそ
なりしかり
なるとも
なるとも
きのふ(コフ)朔(サク)日の夕
そてうとも此物をうけとりて
こゝろのまゝ
めしたまへ
京へ物をよこせ
つれてゆくへしとも
思ひあきんとて
ますます
此けしの番
をしはしあるべく
みまもりすがりて
しと梅(コウ)梅(メイ)しかれ
さうをかへる
源のゆうり
京へ用此尾ゆ
京へ此ゆ
京へとしとしかり
おのゆう

なにはひかりそくとも　紫式部か相也今からと
清くも清くそれと也
よ家りの色々のえ　孔雀を立てひろけと也
何さらしもあかれ　子孫の猶也
其の流れをくらけれ　源の清書より也
ありき花くもなきらす　紫式部の子也
子孫代々絶えて又也　紫式部へも子孫へ此源の
事ありて絶えぬ也
まりて花之後　惟光の子孫也
こりかすそりのありて　源の清書より此物語也
家よりあそ　紫式部か方より清書事也

恵は御かとのに　蓬生此須方也
あまねくすくきそひとらにに四季をすり流くれ
此後京集和寄也　源中最秘抄云
色く清流あり花鳥河海不及清流也いつき海
此物語いくれもより水のなかれのきた也
紫陽よりの音をかとうひ出されしいつき海
むかし人きらの也今案蓬生のまいのとみなも
解説とれ抱むつきさ指すりをうめくなそ
清すくの事人のよみて之出絶よ末摘のみすを
かくし出絶たある人し末摘は紫陽源氏清むすめ
也絶も末つむまて無絶すり此解あまわろへてと云

まりうの弾の
ちうく　わもと　雅光まりうの地
わもと　山人　女房（源氏物語）　雅光
車武さうそくさのうち　雅光うの知つ
ろひてをとこせうとそ　雅光のまとの行地
女のをうり　女武のりい者武事地　光の
はきうの地
さそはつてをんい　とりそつてを地
女嘉まいの　蓼の山地
ふうり物まとと　源の出武うを中地
物さの武人の　物云の物地

なるうをと夜ふうう　いをくうりそのの物地
里ふうへとおの物云の地
家人海を物
なるのにの
云いり物云
いとうをいく
う原物語を
家武の山人う
うのおの物云
うのうにの
ひなさをて

雅光

二条院　二条院ハ法興院ニ准ずる也 同京極

のこをりそれハ迎也　不絶ハ後室うるへし

そはなすり　うきは仏なりと也

ゆりかんとあるハ　御納言ハくて仏るへきと也

家の君達しの御らん　よきあ也

このましきんとよ　母よも継母子はゆへとく

迎給ふ也

涙のとくまちぬを　今るみえしめとどく懐む

兵部卿也

兵部卿宮をあさりくしさそうき也給よ

御肖がせいあさりくしさそうき也給そとあ　くき

きりしうしゅしよ字ハ体字也　朱　花鳥あくり

ハ面の字也あさるにまうせてとありいうしれ

きりとんそとくといふなるへし

おまとにてひおぼくろよ　二条院ハ之変

人の御ぬ不なれとも ひきつくろひて顔ずて

給ふると也　朱　花鳥 遼^{ムシロ}菌^{シトネ}なとあれをひきのる

けのまとありかまりうるれ

さうなんと　まへんをめす也

女ハむやけうらうるそ　朱　花鳥 添英明男女婿

姻^{イン}賦^{フ}をひきり婚姻の賦ハ作者英明にあるそ

後^{ノ}江^{エノ}相^{シヤウ}公^{コウ}の賦也 云後之　河海 端^{タン}嚴^{ゴン}如^{ニ}天^{ノ}后^{ノ}大慈心

柔輭華嚴經　陽體剛強自在陰柔順從陽引文

至剛者男至柔者女

私後漢列七十四曹世叔妻傳陽以剛為德陰以

柔為用男以強為貴女以弱為美故鄙諺有云

生男如狼猶恐其尫生女如鼠恐其武

やうくあさいそこなひ色をそ用也

東のこよ海うの物ハ　源氏東の對ハ音ハ

まへ物をそ色にはふこの言ハ也

やうそ年にしと

ひさ一ハ　ゆくもはるもやとも也

ハ　ゆくもひさ一のとしハ

そこれぬるやさうはふれゆへ若垂乃ハ

ゆりとも也

ゆくとも　そのの物をめる方こうせてうりいまる

ハ　ハ物の方をれたとも也

いそ秀も　源の物也

まさようしうす

よくもと　あくとも先何ものはてそす

ひたもあるこれとも也性ををへうる物要也

こ川つさ　物こ川つさ

のあひつさ　ゆるなさ身にひさ

ちうをうつさ　ゆをを何ようくらんこ何すにこ

さ有をうぬと也何ゆうと

[illegible]

みとまりにしく人　　そうちたのるも

こゝろ恵も　　わまりけしきるとも

われ方も　　ものとは徒毎也

やうく人より　　そうつ二条院のるも

[illegible]　　[illegible]

のられ親　　源也

さうらうあり　　ものとのいまゝ何ものさをうつも

ひとをあみとはる　　ひとをあみとうしたてきと

巻名歌并和歌とんて号せり。撰集を為て法華也

源千七篇の書うりの年代までの事あり。

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

夕貌の歌ゆとてれ　仕事稿などに再さめ
ばる夕貌より別まて接ぎさめうなる人にすり
やあひとうれるも　古象は長所蓼こなどの狩也
家もうこと也　概戦(イミタタカ)みとれもあるそれ夕貌の
いとまりさ　長張るも女さまいは紅おりりおをも
いとらうをなん　やうのもの第本の紅
張うりりめすも　こるとすまん　いるるうんすがて紅を
つもの出さんあも　さてりやとりり

いとめなれるや　第の紅弾(ヒャウ)して也
つまなり　源の一家物をこの紅のもみまを
遠(トゲ)そのはふうるのもみまを
もあはしはまくのんくはすを也
れうつせる　空蟬(ウツセミ)田舎(イナカ)人の紅の紅事也
家洋憲皆(シツカイ)そのの地さうれどに憲皆とりあ
いめくさ海くのすを書也
なもれるる　知んの英の蓼(ゴ)うり
しはみれる也
大方名張なれ
これそのの地也

源の性を書也うこは

なまつのめと
つきていはたの
わんとり
こひとり

源氏乳母也 大弐の乳母ハ
つのめとを源氏物語ハ
まつ孫とを也
是より無つ物語ハ
にまつる便りて作ん也

朱光孝天皇 兼和五年任常陸太守其後貞純
親王等任也 考續日本紀第五承和五年
正月庚申朔壬申四品忠良親王為常陸大守
従五位下藤原朝臣貞公為介
曉峨天皇 仁明天皇 諱正良
忠良親王 二品式部卿 容貌美麗 貞觀十八 三十一薨 五十八

ふるとはる
方をかしてとうさ
ありとうにあ
ひそめ
さくらひと
うの友と
いさ一とさ
てをなる侍い女のなとんもつさのうさと
朱琴 罷 輙 舉 酒
三友 遊 相 引
一 彈 愜 中 心
酒 罷 輙 吟 詩
循 環 無 已 時
一 詠 暢 四 友

猶恐中有間　以醉弥繼之

ちくこれ　さゝやうにきこゆる　源氏物語　朱

さゝやうにきこゆる　命婦の君

いろう　命婦の君　源氏物語　朱

のたまへる　源の御ことのはの　碧

いとゝらうたし　命婦の宮の御

こゝろ　御ものすこしはらの君を今はつきなき

をとりあつめる君

うちとけぬる御　内侍の君　命婦の君

かりのあるへ　命婦の君

寝殿よりまゐりたれ　未摘のまへ　まゐる人

命婦のまへ

はゝ殿のいらへ　まつむの御

きこえる人　命婦の宮

こゝ　命婦の君

君さやうに身よりまゐる人

いふかひなくとのたまへ　命婦の宮　源の御とり

ひてかひなくなりぬとも　命婦の宮　源の御とり

さけりける人　源の宮　故宮殿の宮の

ゆゑ　紙の御

うゑの御こゝろ

こゝのすをひろうて　もるうつのそこ　げ

ゆ　紙の御

けぶり多うたへ
りのやいひすまし　けつしてうらいひ
よしまーとも
命婦とある　命婦ひきつしてたかに
ひせまいつする也
まらうとゝもこんと
こゝもとゝに成るこうまつりなんうに
自を切て張へ
ゆくなう行ても　源の羽也　源氏物語
はるりへうるよと命婦のこと
ゆれくらけちる　源氏羽也

ひゆてて　命婦がひづひ也
いそやいとをすなう　命婦の言也
きにさまあるう
みあるものぎきと命婦のやう
さやうにてゝ人のやう
新しい物さうく　加（コ）常陸宮ゝ也ゆるみと也
さやうのきこさを　ひゆをやせと也
み野りのつう　源氏文と歌と野り給方わ
ふうの山さ也
うへにまあにはりますと　命婦の源へ也
源の寒（ジツ）ほう（ホウ）より　まいゆを内（ダイ）裏（リ）より作ある
をゝ屋ゝる也

さらえり　浦丸立浦りの行也
とんのいとんやうに　をしかてるとれ
らし也
あまりをめいうと　命ばつけまも
ひかねる　ひんあらけさんこめも
ぬれよ　大角山おかうそもあれとも変な
てい兵禁中をけ　けてこも
宋宇多ノ源中陵の勇にあり大角山とこ
所のあい地を発るにあく　弁ち日本紀よ
大角をたちと云　教改うこも大角をこも
けこと　ひかねる　凡宣あ行也

雲日とぬ　西日高也　月をこるて推もめ也
とと入まをを弱り人の形よ物をとも也
かうこそひあうは　ひかねるの物也
まとは陽明うこそ
あうのはあうきこよ　地をつさ　偽者の人なく
ていの事とも也　宋　大和物語絵の大和定國　加たの
かいとの時平にまうで　行てきりかまて酒な
どあうをこのて　取いくかまてゆうもの物
行てうかくぐ　弱る行てそぐふ物　行る俗あうあ
らんなどかえ行てこうしあけさうぐにこの
ものをは俗よあうこは　此ものに松うりなぐう

のぞこうつもりてゆせうそこ　鵜飼（ウカヒ）は川波を分
橋の柱にをまきつけてさてこれ
となんの行ふとゝ決わるゝ　此はなしは
はてゝとあるべし　其夜ゝよりおもひわ
うびをたゞもあうづまをとろく行ふな
どをもりこゝ　けふをこゝろ
かうこゝけらくをのなそこ
源の宰相のうにこゝ　屋うみれど夕色
此ものをいひ中ねいはゞ　ものも　行ふ
ふと見えを也
人こゝ廊（ラウ）ふ　狩衣（カリギヌ）姿（スガタ）なる武士（ブシ）よ　後の行也

あるは狩衣姿なるべし　ものゝ　なるとあり　ものも用ふ
ものもなくて　直衣を狩衣　改めて出行て
又変て　直衣にあらゝ　あらゝ　なるべし
如ゝ　例（レイ）の　夢ゝ　みよ　大臣也
中納言（ナカノヅカサ）の君　夢ゝに　狩衣（コロモ）の人
乃中納言の　ゝけ　行をとりて
ゝなれゝ　源ゝ　ゝを　ゝとも　ゝ　ゝ
源　也

大臣　夢ゝ　の　也
ゝゝゝ　中納言の　源を　一向ふ
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　也

あり源の琴の事　末摘の琴(コト)の事

元服の　乃中将を召して

を後ことなさうなる　その夜

いつまもうつしみし　ように聞(ウケ)なる

花なる人のたまさかるいつもなかりつる

事とおぼつかるる所

思ひのつてに行末

ながらへめるまに　源と乃中将とのゆかしひ

中将の四位の進　文のかたはるるかとれ

されいよいひるる

文を取り給ひて　源氏の進

いさこんとも思ひたるや

ふんとも言はぬ　なりに入れ給ふ

源のおかくとの　所進(ミヤカ)ばる文をうとも

ざるもきこえとの　所なりぬ進面白き

人さきをもと　乃中将の進　ように源氏

なる深つに　なるあとねるく所進

とおぼいもなれ　定めて乃中将の会

はよつさきを　うの方にて　のくへさと進

さうりて　源氏でありうまて所なる

とも乃中将の会　ばいまけどの　つくと進

思つるなく　そまり源氏　初進

いとやさしきに　命婦の詞也出時くのつ井
でおどれ此君ぞかりいつぐしと也
らうしう　源の詞也をかしたりて出給也
見るやうに　又はぶかまき此姫(ハジメ)と同時也
人笑ぬ物思ひ　藤壺(フヂツボ)より逢(アヒ)給ひしを也
うの碪(キヌタ)此音(ヲト)も　夕顔は此一周忌(シウキ)の頃也
いかなりやうて　源の心也かやうにつれ〳〵なるには
いかなるゆへぞと也
いと打とけひく　命婦心也
りそくなれて　命婦の詞也又よつきの給
おどいせ待ほどおまり君も拙つきを志給ふ也

ほをほし出給ひぬ　ゆるすと志給ひぬ也
こそ　此こそは讒(コ)句(ク)とそまうづる句也
文章(ブンシャウ)乃称也　新注
うれうるはつゝぬ　源の詞也まうさるゝよと也
打あにある人の　命婦乃心也
又思ふも物けす物からも　又の音の大将は
云あんせ此音云ひとりよ催(モヨホ)さる也
すうしき絶りう　命婦の心也
いまうも打あさわか　命婦もともの心やうに越
いとかきいつては　命婦の詞也
ふえやすな　ふやわきさ也

拍子にくいなのえ拍子打つん　拍子にて源氏の対面の事と也

人より拍子をえんやうも　非恋の類也

いんぜんなえて　無言なるいなてこそひと

いんぜんえて　なるはうやうにていわうるんと也

すのこなるん　命婦の類也

ふるまのきうるる　本尊ゴンを安置する所

なるん

なるん　命婦の立ち居うの

なるん拍子　命婦の立ち居うの

なるとうる方いとも　もてとも也

長人の伝授　長い源氏すぐ家に伝授の

まはと也　紀伊守也

まりてをな　源氏歌舞也

ろりるれるや

いうこうひ　ぞて海　無言也　人に無言を

をぞ思いまして海　所也　ものいひそとなぬ

汁なると也　もるんしろ　朱也　海　耕雲本

壺ツボ　まろ〳〵俯仰キヤウ　嘲咽シヘビ　進退ヒテ　而血泣イサウ　又相傳の

義あり　河海月本紀ラ引テ進退ヒけつむ可

強也　義あるさの進退ります　満ミル也を

所也　物ものいひうとうけたてばそれる　浦ウラ

今迄ん物なないそとうけたてうさられてみと

商付ものを言ふて代つきに朋輩のいが
事なや・進退あれとも地獄をさまにうたくか
ふれのてるそ人いつ人なるへ一人のとがまに
物をはさすはをとまつふをはいつまいけ進退
とどまのてとあるにかつるとをそ・そうそ・我
世・海と壱(ヒトツ)と須つ・そ・公(コウ)けを用ふて
五月十日於議定所講談之時けゆと申つ
ものすき　はりすいとやいひそ
なでせあれとすさなる・家のをいるまぬ
ふけるをを
かひつまて　花鳥うみとり・鐘つきてとぬ

ちこいとのぬとをされとも我い又言ふををすい
なをとを
人間(ヂテ)よあるぬ　けの(ビウ)ま搗のはの(ジウ)と俗ある
やうにいひなるでとの分つるの行ふ所うを伯
搗いひなるをさそ・ま搗の角(ミツカド)の角と源氏さて
あ行て今ちとを申りうとき行ふを
いとあをも　をいあるは地
いとうを　海よるびくまぐきれのあるれの
不審あるを・月とを人のをうをのをを
れをひうるひかをを
ろうをあぬ　源の銀(ギン)ど行を
をうのををうりを(レイセン)を人

をんなたちとそつふさとうたを新しくかつ
ぬきでもんぐらなれたまもとひもそり
まゝきとも是源のはも
ゑやすを拾ひ孫　源の羽也
きのまうて作る　弓はもの羽也
朱雀院の切番　弓はもの羽也
のきつをそうと　弓はもの羽也
いと孫やつけたりと　養生ふるゆゆはの羽也
絡り燈もるの　絡りもるけの事也
おくいたる　弓はもの根也
かしこうみ　まつじの方也

あまりもてあそびもあれりきやとり
おふいぞやさうにはりきこゝもかゝり
みこりはりとのはりの羽をうけそも
ゆくとうとも　梅朔のうもを逆てもれをる仏
とも二はもあとも也
夕雲也　ゆあらも也　朱花云　如宮ふ喩ところ
たまあよの　あらはも
ふの第もを色よきれいはひをそれ
ふの色のうてうも也はふりの房をさせび色の
よくなる也
ていさすにりつのうなるこゝ

ゆくさぐハ中なを地ひ物語書きよ侘ぶ書代
おりてよく成る様ゝ今家にゆくと
の節とあるもそゝるもひるゝ
みもひとく　ちゝてもゝさる地
乗ひけるも　源いろりてまゝきて地
うこふい　源氏物語すぐ美ゆを知ふ
なげきなる地
海て行よのゝ迷行て　赤猫の方へのゆるもあり
しをかぐふのれて大変ふむ行るゝ
大のちるさ　昔今の世代ゝ有るあり
朱　長一尺八寸広四寸八分　遊仙窟詠尺八ゝ

うてこをゝ　花鳥の動例有奥
礼記日鐘鼓在庭琴瑟在堂云云
延喜四三廿四舞御覧左大臣時平公依御階前
自打大鼓云云　寛治五五二十五殿上競馬主上
堀河院自打大鼓給此時置堂上
はゝ源のゆ源もな
きゝ地
ぬすまれ　源四なる系へ十分をあるも
屋うゝく思ひありさ行地
ゆさぬ汁ゝり　源を金毎ゝ物品地
いと海なき行うや　源氏詞地

物をひきてぬやうなるを　わすれ事物のつれ
なりをこそさんしめも
戎狄是膺荆舒是懲　毛詩
ものとうちもまく　令抄也
もりもれ人にうみられぬるかはよりのや
よんひい齡とみのようひとあ貳ときくめゆ
えれはいとうれ　行幸をぐてとも
うの也　紫宸二条院へうりはるゆいの者
そそく宴月の也
されとうつうも　奥部なはさまも
をりをりうあをみぐれさ

朱也　丁のつら井みもうぐろめも
ひそく　秘色　漁隱叢話りを越器とも云
青甕のもも
はぐいは膳也　花李部王記天暦五六九御膳沈香
折敷四枚用秘色云云河云越出其色翠青殊勝仍
秘尋常不用之仍号秘色
なにのくさはひもの
そうるはも也　丁我道をもの〻をう
さすにくをうれて　古種也
陪膳候をは人御をさするも奉氣也
内教坊　花大宿ふあり

あ[illegible]とおり
とひとらあて
世中をとうとはさ[illegible]
るひ[illegible]あるねん
伯牙か琴院よ　伯牙か琴あるよ[illegible]の月か雪
とのの奇[illegible]人也　詩流か雅とも
[illegible]りあそはす
あ[illegible]也　河[illegible]の事
いさとよそりする　孫[illegible]也
わらうして　[illegible]也
あ[illegible]きかの　源の翁也　[illegible]の意也

はつかい者事也
貧窮問答の事仮あり

へうと
いと[illegible]きかに
はやせをせかへ
こぬ[illegible]
ものとけまとりの
とんあ[illegible]けのうく
憑潜　[illegible]
さをか　か青也
さ[illegible]ひて
ゆ[illegible]色　花[illegible]紅可也

源のけさ海也
宮に[illegible]のん[illegible]也
源也
源氏ちとみ[illegible]とひて
[illegible]り事橋のみさ海をう

論語紅紫不以為褻服　[illegible]　荘子

花云
延喜十七年参議三善清行請禁深紅衣服
議云但浅紅輕黄未及次色者不在制限云云今案
紅紫深色禁色とゝ
制禁に及ぶ事も著る故也禁色を聽されて
著用の故ゝ深色をゆゝ色と云説ハ誤也
三善清行申依世ヲ出紅禁一礼サヲ備也数本如此
ゆゝしきなりゆゝしきうらきぬの
色のゆゝしき也　朱花云掛に大ふすりの掛ハ宮一乃
人あるべきとも著也きぬのたにうぎ芸上ゝり
小掛す法ハ不知ふすりあゝる也
ゆゝしきうえきぬ
昔も芸を用ゆゝ避逅とゝ

朱范云
昔蕃客参入取重明親王乗鴨毛車着黒貂裘八
重見物此間蕃客纔以件裘一領持来為車物見
八重大懸云云
とゝるれとの羽跨白也
きゝ宮　改宮とて弁内記和記史
なとをゝ也ことゝしきゝ海とゝ　朱結綴のゆ
ひとゝ
ゆの云也
深紅紅也
ゆのきゝ人なゝ
朝日さす　今歩摘の命のゝ緑ひとゝ
不のあ浦をいもとみゝ兵ゝる命を
ゝゝひのゝ浦とけて寄ゝもとゝれとゝもいまゝとゝ

明月抄摘葉
十六

さびはてぬ也

松風雪のこゑ　白雪風つよく吹也

あくるまもしらず　毎夜の物語のこと也

あるまもきかぬ　色々のいろまもしらず

紅葉の錦のうへの上にかくれ　今ちらもよろづさん人

なびくばかり世界の色やうにもなれを新に行也

とかやうの語い影畧互見詞也うつり変り

あるかなりをんうとひまぐれなんかと也

二と無る語也　引こ不及白雪色を云也

あるこれ来のと　無独の花ふる来の松山こえ波のあしぬ

日うつれば　潮をくつる雪の白浪来の松山

こえてそ見る　今集はあ百てあしにやはるれさ海

とこそ拾ひの絶沒事みさとみいるまや

きぬの雪にのひて　白雪をそけるを雪よ影

して書うるはず面白

あるの花わまりなる

白雪の　朝のさ海也

ありにけり　はるの神ちも是を見る人の花

めぐまれさとも也あるさ花神のあ花神也

今集　音神の名のよつまの松山のりの音よりけ

わたりのい　秦中吟　白居易詩の義乃也

指を入て頭しらるる時は
是をかりにくるしむ
おこりわまて
しつかなるとき
此灯已消て指を
世間なとを入て頭しらるるやうに
入まいの春中冬の夜深燈更尽雪白紛々
幼者取不蔵老者體衰温炮鑪子寒気侵
入鼻中章 朱 私云未句の鼻中字肝也
取意皆叶り今樂
今こうまきまなん

ほとんど入れすくへ

ほとんどとはすくなきとも
よりてなる 源氏性殊勝也
ふるよのかたみ
ふるはまやうまも 面白語也
内のとのゐ 赤橋の性也
あ屋きすれ 源十八の文也白屋也
こうこれからまいれこそ 大橋の命婦の詞也
のまより と侍りへ
みられよう 赤橋家よりの
たしめをるこ 檀帝也 朱 陶奥ようすさ
ようを

たえもうらかすまよ

別れそ花のまつさと不審一行也

ひきこあられすい　　源氏物也

秋まれかさん　　藤中納言

秋海さうさんくもあるそ白あの

まこ笹のさりとる時也　　たせとん法通よ時也

いるるへしらとそしへ人なりをるとも也

今屋う色の　　花ちにみしうり是いきあと

いろ氏こきも也

なのしのうう人　　なををきあよそ

寄世の寄衣とんしもとあい裏面紅の也

衣あれとも也

今案紅の寄衣の事不見不分明也色の寄

そしるへうも今やう色のえゆすまぐ法

おうをめれとも法とも

めさうとも法く白をうてなのうう

てひうるとも寄衣の事也こまやうとも云

を色のまいうるへ織さ海みどのこ海屋

れのも今案ぬ紋ぬよ杉袋裝束抄云法成寺

関白直衣布袴紅梅織物直衣紫織物指貫皆

練着之　寛弘四年三月五日法成寺関白左府行幸

水宴主人着桃花直衣柳色指貫山吹出袖永久三

年十月十四日五節童御覧日法性寺関白紅梅浮
文前木指貫皆紅衣此時前今案説非也可破之

なつかしき　源氏梅の枝の伝ふる人
色こきはなとみしとも　紅梅
みしとも人をあくかれてあるよう
花のうへ　命婦の書たてまつるに手摘とも
源氏の事歌也　源氏いつもはなのうへのうたあるに準
ふるさとはあるかさもあるものを　命婦の推量歌也
かりくの月新　月新なれは源氏の君の
へきてなり　朱今案是は命婦の事をいふ人〻源
氏の月新なれは也　命婦なりけ

月新なれはなりけりとなつかしうもてなされと
さりあるは物ごとにはなくさうしのはとあるみは
此の臘月新なれは也　命婦なりけ
時くはなり命婦いとまいりをへ
れなの年の　命婦手摘のはるとあるは
ふるさとあるとて　ふるさとはなりけり
えとも也　せあてはは命婦のはつかれとなつかしと也
はつかわさい　はは衣を源氏あさまとも也
あふはは源氏せさ勢
ふるやきのふ　ふるやはいさあるとも
の風くこと　朱用梅也　花のあるとあるとも

もゝさゝとあり。そばゝとん雪濃家れ雪絵
ゆ〻ゆ〻うりと深のあゆ〻うちうへて
うゝもめれ花の色れとと　求子の羽也深れに
ずゝひも求子に雪月てゝ三笠れのとうゝひ。
み他ゆれてゝを色れ和ゝをゆゝうゝ也深れゝ
に家にゝゝひゝらの家れとうゝひゝゝゝ也。
尊の色をゆてゝ也れ也　秘抄也
命婦ゝいとゝゝ
ゆゝ也　命婦ゝゝゆてゆゝと
ゝゝあんゝゝゆゝ内侍ゝと　深れ秘ゝゝ
んゝゆゝゝゝ也

命婦の入てゝ也
あゝ雪雪さ雪雪
花ゝゝゝゝにゆゝ一人の女房の羽也ゝいで
是ゝ言よゆゝんゝの雪月れとゝゆゝ也。
命婦ゝさゝれゝなゝ命婦の雪月れとゝ
とゝひゝゝ也ゝゝゝゝずゝゝゝゝ雪ゝゝゝ代命婦
ゝゝ也つの紀雪れゝもゝゝ也ゝゝゝ遠ゝ府の民部
の雪れ羽なれゝ我月のゝゝゝひなんゝ
ゝれ雪ゝ也
ひ弱ゝこのめゝ　あゝさ花やゝゝゝん
ざれ事也ひねゝゝ紅也
あゝゝゝゝ　ゝゝあゝゝゝゝの月をゝり

このゆびは　雅也はけ中あい鼻はあるなるなと
たゆの今姫　けはこの人鼻あるき人也
あるぬ袋を　ちらちらぐつぐつ長ゆとこひつる
みかゝ長寿ゞゝもつてきれがなとなてあるはさな
けはるゝいゝゝゝのなぐてどりゝゝひとあるは
かゝ地　稽古（ムヒグ）いゝゝもこんもみのゝ也ゞゝひて
いゝゝいゝゝひゝゝなぐてゝゝ　朱ゝゝゝゝゝ
えひそめ　蒲萄也　生也最濃也
つゝゝはるて　源千八方の四月也
さひゝゝゝの　学湾ゝゝ也
ゝゝゝ　尚衣正（シヤウエ）進翠雲裳（スイモスタ）也

あをもて　はゝて
ゝゝゝゝ　今の紫震殿（シンデン）ゝゝ也
ゝゝゝゝ　ゝゝの也具ハ　ゝゝの也ゝゝ
あるゝゝゝ　時源ゝゝゝゝ
さゝ也あるゝゝ　也ゝあるゝゝ　衣裳（イシヤウ）也
をゝゝてゝゝ　通例（ツウレイ）の人ゝゝ源の也
方ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝてゝゝ　ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝは　ゝゝゝゝゝゝ
けゝある　ゝゝ二流ありゝゝゝ　朱ゝゝ
二流物元兵衛ゝ也ゝゝゝゝゝ源

射て元の所へ帰りて居るなり
所のつきをさでうたざ汁と云事稽の云ひさだ
ものの地芸所をゞ何ともいはれぬ地是も云
のをこれらまこゝはけの一所の利
まつ浦りのい　月多あるもれとも
さへつる　月多モ千ドリ百のるさへつる
義とそこる　朱　奥へ義とうこのへこれとお
がつる浦めよみ　こゞこれそ遠つる伊所アヘ
不来汁て動之こ　別る月多あるつきれ又業
平此ヒラ此ヒラ程ヒラそのこの此ヒラ
ぬるこ紅ヒラ　ぬる云紅ヒラ　ぬる云紅ヒラ

めるこきあの事をたるべ
是こるぬたるべ
ひとんのさこう　さこの地地
こそこうのめ
へいちう　河海みしこう　朱　平奥又家平仲
月多　ふりこそつ　こい高これとも人ます
こくかのきこきよ
こ里なのれ　儀あこ地
こ海へこの　そのの地地